



大阪府立市岡高校 山中先生



十月に農村ホームステイでお世話になりました。当初は期待と共に不安もありましたが、いざ始まってみると生徒の五感を刺激するものが十勝にあり、いつしか不安は消えました。五感に関する具体的な感想として、次のようなことが生徒から挙げられました。視覚は「空気がきれい」、「星がきれいで、夜は暗い」。聴覚は「風の音だけ聞こえる」。嗅覚は「土や牛の匂いがある」。味覚は「野菜が甘い」、「水がおいしい」。そして触覚は「土、自然、そして人と触れ合う」といったものでした。

自分達が日頃口にしているものが、どのようにつくられているかについて理解し、「生産者」と「消費者」という視点でつながるきっかけになったと思います。見ず知らずの誰かではなく、「十勝

農作業のときの、やりねを獲ったのも初めて経験したんで、楽しかったです。スーパーで北海道産のやりねを見つけたときは、もしかしてって思ってめっちゃ親近感おきました。他にも、芽室産のポテトチップスが売ってて思わず買っちゃいました!!めっちゃ美味しかったです。大阪に住んでいるから、北海道の天気とか関係ないのに、ついつい見てしまっ「北海道、寒っ」とか言っちゃいます。お陰様で北海道が身近なものとなりました。いつの日か必ず再び北海道を訪れたいです。

朝、トラックでドライブに連れて行ってもらったときに、広大な畑がずっと先まで続いているのは、感動しました。8時くらいから始まった木刈の作業は初体験だったので、ものすごく苦労しました。でも、この作業が終わったときの達成感はすごく「これが仕事なんや」と実感しました。お別れするとき、僕たちの乗っていた車が見えなくなるまで手を振っていてくれたときは、とても嬉しかったです。たった一日だったけど、僕たちを本当の家族のように迎えていただき、本当にありがとうございました。

牛の赤ちゃんにミルクをあげた後、自分の指を吸わせてあげたとき、とても牛の赤ちゃんの力が強くてびっくりしました。このとき、お母さんが「これが生きるということ」という言葉がとても心に残って印象的でした。

の〇〇さんが作ったものだ!」もしくは「自分たちが行った十勝産だ!」という気持ち食べ物を残さずに大切にしたいという気持ちにつながることでしよう。さらに「いただきます」の背景にある、命を「いただく」という感謝の気持ちを再認識することにもつながったのではないかと思います。

今、人の評価(目)を気にしながら、いわゆる空気を読むことに神経を付けている生徒が多くいます。そのような生徒たちにとって、先入観をもたずに、そのままの自分无条件で受け入れてくれる大人がいることはどれだけ癒されることでしょうか。飾らない素朴な人柄・温かい家庭の雰囲気、少し固まっていた生徒の心身をとがして開放してくれました。農村ホームステイ終了後、受け入れ



家庭との別れ際の生徒たちの涙が何よりそのことを物語っていました。今回の修学旅行を通じて担当者として、私は「バトンタッチ」という言葉を強く意識しました。

「親が子どもへ伝えること」、
「教員が生徒へ伝えること」、
「生産者が消費者へ伝えること」、
「消費者が生産者へ伝えること」など、次の未来を担う世代へ向けて、あらゆる場面で伝えることがあります。素晴らしい体験をした生徒が今後、自らの体験をもとに発信をしてくれることを期待します。

